

## 公卿が愛でた『山川』

大塚喜子

仲冬の洛北は、刈り取られた稲の上を微かに動く風の音以外何もない。脇の木立に分け入ると、背の低い白壁が見えてきた。大矢登志子は歩みを止めて奥の岩倉実相院を仰ぎ見た。

櫛巻き結びの髪に簪を指し、銘仙に黒縹子の帯をしめたこの身繕いはいつもと変わらない。華美なことが合わない性分なのだ。襟元と袂を揃え、従ってきた下男から風呂敷包みをうけとり、胸元に確と抱えた。

文久二年（一八六二年）八月に孝明天皇から蟄居を命じられて四年が過る公卿岩倉具視に、登志子は会おうとしている。

「田舎女に用はない」と門前払いされるのを覚悟していたが、力ある方の話が通って、お目通りが叶うことになった。

嘉永六年（一八五三年）六月ペリーが浦賀に来航すると、幕府と朝廷に緊張が走り、右往左往の大騒ぎとなった。二十九歳で、家領一八〇石の下流公家の岩倉は「今般の危機の対応は朝廷が主体となる。従前のように政を幕府に任してはいけない」と言い太平に馴染み、海防の何たるかを学ぼうとしない朝廷の先頭に自らが立とうとした。

権力者の知遇が必至と考えた岩倉は、三十年間にわたって関白を務める五摂家筆頭の鷹司正道の歌道の弟子となり、翌年（安政元年）孝明天皇側近の近習となった。

安政五年（一八五八年）岩倉三十四歳の時、アメリカとの通商条約調印をめぐり、朝廷と幕府は正面から衝突した。老中の堀田正睦が通商条約の勅許（天皇の裁断）を求め上洛した。既に政の多くが江戸から京都に変わりつつあり、公家の動静は重要な鍵を握っていた。天皇は関白職を鷹司正道から、従前より幕府を支持していた九条尚忠にかえる以外は何も決められないでいた。

九条尚忠は天皇に（条約調印を幕府に白紙委任する）勅答案を示した。関白のこの決定に鷹司正道など公家の多くが猛反発した。岩倉は一計を案じ、中流、下流の公家（八十八人）を集め、御所に押しかけ、天皇の御前で自らが記した意見書【神州万歳堅策】を読み上げ、五時間にわたり九条関白に談判した。九条は幕府に白紙委任するとした勅許案の撤回を余儀なくされた。

岩倉の「神州万歳堅策」で注目すべきは

【朝廷は通商条約に反対する立場をとるが、幕府を敵視するものではない。今般の諸藩の京都での動静は国内騒乱を誘発する危険な要因である。意見は異なるも、対外危機に対して国体が一つとならなくてはいけない。朝廷の権威上昇は当然である。しかし、幕府の弱体化は望まない】とある。

幕府は勅許をめぐる折衝に失敗した堀田を罷免して、無名だった井伊直弼を大老に据えた。

井伊が勅許なしにアメリカとの通商条約を締結すると、これに悲憤した水戸・薩摩の浪士に桜田門で暗殺された。岩倉は孝明天皇に

「未だ幕府の力は強い。天皇の妹宮の一身は帝位より重い」と和宮の降嫁を建策し、天皇はこれを受け入れた。

天皇の岩倉への信頼は厚かったが、一方で急進攘夷派の公家や藩士らは岩倉を（幕府と通じて和宮の降嫁に及んだのは許すべからざる）として一斉に岩倉と九条関白を攻撃の対象とした。天皇は弁護につとめるも、急進攘夷派は自らを（天誅組）と名乗りながら、洛中洛外で幕府側に立つ公家たちを攻撃した。

朝廷と幕府と薩摩・長州が入り乱れる暗闘が続き、岩倉が近習を辞しても情勢は収まらなかった。万策尽きた天皇から蟄居を命じられ、西賀茂の靈源寺に移り、更に西芳寺に籠っても、急進攘夷派の奔流を押し止めることは出来なかった。天皇から「洛中からの追放の命」が出るに至り、岩倉は洛外の北、岩倉実相院で慶應三年に洛中帰住が許されるまでの五年間、落髪して友山と名乗ることを余儀なくされた。

岩倉は立ち上がって障子をあげ、楓と、その横の形の良い小ぶりの松に目をやりながら

「大矢殿は和歌に長けているそうな」

「和歌を学んでおりますが隠居の身でございます。それほどでも御座いません」

「して、国はどちらで」

「はい、出雲の国でございます」

「ほう、出雲の国ですか。歌を学ぶために京にこられたのか？」

「はい。歌詠みは一度は京に出てみたいと思うものです。二年前、家業の（たら）から離れ、隠居の身になりました。王貫峠が難所ですが、出雲はさほどに遠くは御座いません」

「王貫峠といえは後鳥羽上皇が」

「はい、さようでございます。隠岐の在所で我が松江藩がお守りしました」

【我こそは新島守よ隠岐の海の荒き波風心して吹け】と庭の松に目をやりながら居住まいを直して岩倉は上皇の歌を詠んだ。

「凛々しいお歌でございますね。隠岐の民は上皇様を今もお慕いしています」

話題が歌に始まったことは幸いで、気が付けば入り口に控えていた茶坊主はいない。登志子は風呂敷の結びを解いて、出雲塗の菓子鉢にいれて持参した『山川』を御前にさし出した。

「これが世にいう松江藩主松平不昧公が好みだった『山川』ですか」岩倉は頬を緩めて、懐紙を取り出し、手に取って口に入れた。

「美味い」抑揚のない平坦な声は登志子を知る公家たちとは違う威厳がある。

出雲の鉄師の娘として育った登志子は、子供の頃から書や和歌を仕込まれ、十八の齢で同じ鉄師の家に嫁いでは、夫共々平田学派（篤胤）の国学に夢中になり、いつしか心に勤王の火がついていた。

「ところで、いまはどこに」

「はい、三条麩屋町の伊勢屋の裏に家を借りて住んでいます」

麩屋町の座敷三間ほどの寓居が登志子の根城である。京に出て間もなくの頃は物珍しさも手伝い、歌詠みに行くと言いながら、名所見物に出かけていたが登志子の本来の目的は別のところにあった。

最初に接触したのは平田学派に通じる長州藩士だった。その藩士の伝で紹介の輪は石州藩士や公家にまで広がり、登志子は京で急速に尊王攘夷の運動に引き込まれた。

田舎女とはいえ登志子には藩士や公家に負けない学問がある。加えて財もある。気さくな性分の登志子は「出雲の国から来た刀剣に詳しい歌詠みばあさん」として慕われた。

各藩から集まってくる志士たちの意見を公家衆に伝えたり、又その逆に公家の動きを志士たちに伝えることもあった。

出入りする志士たちに気軽に食を振る舞い、酒も常に用意した。これは夫共々に飲む酒で、車座になって天下国家を論じた。登志子はその場の空気を読んで、自分だけしか知りえないことも多くあった。

果たして岩倉は「悪漢なのだろうか」「否、何か腹が有るのだろうか」尊王派の議論は延々として止まらない。岩倉の本心がどこにあるのか掴みようがないのだ。志士たちは

「岩倉の腹を探るには歌詠みばあさんがいい」と言いだした。もとより登志子は断ったりしない。岩倉を佐幕派とみていないからだ。急進攘夷派にたいする登志子の報告いかんによっては、岩倉は佐幕派に切って捨てられることもあるだろう。登志子は志士たちの期待を背負って岩倉に会いに来ているのだ。

茶坊主が茶を入れ替えて部屋をでると

「岩倉様は今の幕府をどうご覧になっていらっしゃいますか？」さりげなく、しかし、いきなり切り込んだ。岩倉はこの問いかけを遮らず、怒りもせず、二つ目の『山川』を懐紙におくと、ゆっくり庭に顔を向けた。さやかに風の音が聞こえても、障子の松の影は揺れない。果たして岩倉は登志子の問いにどう答えるのだろうか。登志子も岩倉同様、庭の風の音に耳を傾けた。

「大矢殿はどう見る？」

「私のような一介の女が時世に口出しするのは憚れることでございます」

「一介の女が危険を冒してまで、このような所に入るとは思わない。単に『山川』を持参しただけではあるまい」声には抑揚がなく、平明で有りながら威力がある。

攘夷急進派から回された登志子が、何を企んでいるか引き出そうと考えを巡らせているだろうが、岩倉はそんな様子を微塵も見せずに

「昨日、津和野の松平慶徳殿が侍医（森静雄）を伴って訪ねてきた。」

「慶徳藩主自ならば津和野藩は朝廷側につくと態度をきめられたのでしょうか？」

「そのようなことではない。半年前に生まれた侍医の男子の命名を頼みに来たのだ」

登志子は拍子抜けしたが仕方なく

「それで……」

「林太郎と命名した。森林太郎と命名したのだ」

「それで……」

「慶徳殿は森林太郎に独の国で医の術を学ばせたいと言っていた」

「天皇は大の外国嫌いのご様子。攘夷を幕府に実行させたがっついておいでしょう」  
「はははは。大矢殿はこの岩倉に率直な物言いいをされる」岩倉の笑い声に引き摺られて、思わず目が合った。岩倉の目に警戒心は見えず、口元も結びきっていない。

「大矢殿が言われるように政権は朝廷側にあるべきだ。幕府に委任してきた政

権を今こそ朝廷に戻し、民が一つになって国を守らなくてはならない」

「しかし、尊王攘夷の急進派は誠の攘夷には、先ず武力で幕府を倒さなければならぬと言います。幕府に加担していると目されてしまった岩倉様が天誅として命を狙われています」

「正面から政権を取り戻そうとすれば、必ず武力で抵抗される。それは是非とも避けたい。隠岐でお隠れになった後鳥羽上皇の御代と今は違うのだ。もし武力で争うとなれば、諸侯は二百数十年の徳川への恩義があるから幕府側につくだろう。国内で内乱状態が続けば、その中から新たに権力を狙う者が出てくる。それよりも恐ろしいのは、内乱に付け込んでくる外敵の侵入だ。内乱が起これば非力な朝廷は帝が全責任を負う立場にお立ちになる。今幕府は帝のお力にすがろうとしている。今が好機なのだ。政治は関東に委任して朝廷は権力を奪うのだ。私が命名した森林太郎が独国で医術をならう時も来よう。皇嗣祐宮の文の筆勢が強くなって、字の不揃いもない。ご立派にご成長なされている証だ。薩摩は藩内に鉄工所を作ったと聞く。

大矢殿、良く聴けよ。攘夷が目的ではない。朝廷の方針を幕府が実行することが肝要で、政権が一つになることが重要なのだ」

「然らば、武力で幕府を倒さずに平和裏に政権を朝廷に戻すべくお働きなのですね」

「さよう。帝にはそこがわかっていただけなのだ」

「和宮さまが御降嫁なさったのは、幕府と朝廷の和睦をお考えになった上での事だったのでですね。それが判れば、志士は岩倉様のお命を狙うようなことはいでしよう。世間はあれこれ申しますが、岩倉様の深い考えを私のところに集まる志士に必ずや伝えましょう。それでもまだまだ物騒な世でございます。くれぐれもご用心なさってくださいませ。ばあばを相手にさぞやご退屈でありましたでしょう」

「ほう：：先ほど迄の険しい顔つきがゆるんでいますな。大矢殿、歌詠みとは名ばかりだったな。一つも歌を披露してくれないではないか？」

「ばああの歌など他愛ないものでございます。」

「菓子は美味かった。思うに『山川』ですっかり大矢殿に騙されてしまったぞ」

岩倉は庭に降りて、木犀の小枝を折ると菓子鉢の上に置いた。

「風呂敷に包んで持っていかれよ。麩屋町の志士たちへの土産にせよ」

登志子は小枝を風呂敷に包んだ。

一ヶ月後(十二月二十五日)登志子は「孝明天皇が死去した」と知らされた。風邪気味だった容態が一夜にして急変したのだという。

年が明けると新帝の体制づくりが活発化して、九条忠久ら五十人の公家衆は赦免、或いは閉門が解かれた。朝廷内に異論があった岩倉が完全に自由の身になったのは遅れる事一年、王政復古のその日であった。直ちに明治天皇より新政府の参与に任命され、政権内の中枢の位置を占めた。

登志子は岩倉が去った実相院を再び訪れ、夕日にほんのりと赤みを帯びる白壁の前で

「再びお目にかかることも御座いませんが、どうぞお命を大切に岩倉様のお力が充分発揮できますように」祈りを込めて深く頭を下げた。

完

参考文献

浅井壮一郎「明治維新」戦意の研究

創英社